



# 立て心よ 行け私よ

No. 3

【問題解決力】 【他者関係力】 【自己更新力】

文責:中村 文成

## 中体連北信大会～無償の汗の尊さ

6月1日の北信陸上大会を皮切りに、中学校体育連盟主催の、運動部の大会(北信大会)が行われました。壮行会では全校から力強い応援が送られました。

大会では、墨坂中学校代表として精一杯のプレーをみせてくれました。勝っても負けても、見ている者の胸を打つ試合が多くありました。

北信大会を勝ち抜き県大会へ進む人もいれば、これでの活動に一区切りがついた人もいます。今まで頑張ってきたことを、これからの学校生活や活動にいかしてほしいと願っています。

7月からは吹奏楽部と合唱部のコンクールも始まります。墨中生の活躍を期待します。

今日は壮行会でした。どの選手もカッコいいユニフォームを身につけ、堂々と、凛とした表情で思わず見惚れてしまいました。3年生にとっては最後の大会です。なので私は今までの壮行会のなかで過去一大きな声で気持ちを込めて応援しました。

選手たちには精一杯がんばってほしいなと思います。(3年生)



今日は壮行会がありました。先輩たちがステージに並んでいる姿が、僕はとてもカッコいいと思いました。僕もそこに並ぶと考えると、とても楽しみです。(2年生)

大会結果については、HP 上では割愛いたします

## 校長講話 「星野富弘さん～優しい心がもっと優しく～」

今、前期人権教育月間です。日常生活の中で、友達等に対して「死ぬ」とか「消えろ」というたぐいの言葉を平気で使っている人はいませんか。そういう覚えのある人も、それはきっとネットゲームやイン

ターネット上での情報から、そういった言葉にいつのまにか慣れてしまっているのではないかとも思います。しかし、ちょっと立ち止まって考えてみれば、人に、友達に、後輩に、そうした言葉を言うこと自体、自らの人権感覚や人権意識を見つめ直す必要があるのではないのでしょうか。その言葉を浴びせられた人はどう感じるでしょうか。何を思うでしょうか？

今日は星野富弘さんという人のお話をします。この写真の方です。そしてこの人は、このような絵や詩をたくさん作られた方です（注：スライドで提示しながら）。この人を知っている人はどのくらいいますか？

ぜひ、これからのお話を聴くことで、皆さんの優しい心がもっと優しくなるように、さっきのような言葉をもし平気で使う人がいるならば、そうした言葉を二度と友達等に言わないようになって欲しいと思います。そして、さらに自分の命と友達の命について考えて欲しいと思います。

54年前、24歳の新米の中学校体育教師だった富弘さん。

真っ青な空が広がる日だった。1970年6月17日、群馬県高崎市の中学校で体育教師に就いたばかりの富弘さんは放課後、クラブ活動で器械体操の指導をするために体育館へ急いでいた。生徒たちを前に、宙返りの仕方を教えるべく、踏み切り板を力いっぱい蹴り宙に舞った。その瞬間、「パァン!!」という音が耳の奥で鳴り響いた。見えるのは天井だけ、ざわめく空気——。生徒たちが心配そうに駆け寄ってくるが、手足がどこにあるか分からなかった。

前橋市にある群馬大学医学部付属病院に運ばれ、検査の結果、宙返りの最中に頭から落ちたことで頸髄（けいずい）を損傷していることが判明した。田植えをしていた父親と母親が泥の付いた長靴のまま駆けつけたのは、その日の夜。教員になったことを誰よりも喜んでくれた両親。けがの重大さを隠そうと体を起こそうとしたが、どこにも力が入らなかった。

「夢に違いない」。そう思おうとしたが、現実にはさらに過酷だった。肩から下がまひしていたことが影響し、熱と呼吸困難で危険な状態が続いた。群馬の山間部に生まれ、器械体操と登山で培った強固な体力が命をつないだが、手足の自由は失われたまま。「自分は治るのか」。恐ろしくて誰にも聞けなかったが、2年後のカルテにはこう書かれていた。「四肢まひ、機能回復の見込みまったくなし。現在の医学では積極的な治療法なし」

## 24歳 新米の中学校体育教師

### 宙返りをした時の事故

#### 2年後のカルテ

「四肢まひ、機能回復の見込みまったくなし。現在の医学では積極的な治療法なし」

寝たきりの入院生活を送る富弘さんの元には、同級生や山仲間からの手紙が数多く届いた。「短くてもいい、お礼の手紙を書けたら」。上向きのままサインペンを口にくわえたが、頭を浮かすことができず1本の線すら書けない。その様子を見た看護実習生が声をかけてきた。「横向きの姿勢で書いたらどうでしょう」。顔の前にスケッチブックを立ててもらい、ガーゼにくるんだペンをくわえ頭をずらすと、ペン先が動いた。口で書く初めての字。大きく「ア」と書いた。よだれがガーゼから染み出ても、書くのをやめられなかった。

「筆を口に字を書くことは、器械体操と同じだ」。最初はできなくても練習の積み重ねで技を体得したことを思い出した。母にスケッチブックを持ってもらい、一文字一文字を精いっぱい書いた。その頃、前橋キリスト教会で富弘さんの話を聞き、毎週見舞いに来てくれる渡辺昌子さんという女性がいた。渡辺さんがある日持ってきたのが、病院に来る途中で摘んだというハルジオン。普段は畑の天敵の雑草だが、眺めているとその美しさに引き込まれた。

絵を学んだことはなかったが、中学時代に山登りを教えてくれた担任の美術教師、富田克己さんが持ち歩いてきたスケッチブックを思い浮かべた。いつの間にか、お礼のはがきはいつも絵が描かれるようになっていた。一輪一輪に向き合ううちに、生きる力の奥深さに気付く。「花に描かせてもらおう」。そのままの美しさを切り取り続けた。

絵を描き始めて6年がたった79年、展覧会「花の詩画展」を開いた。関係者の提案で、描きためた絵

の横に思いを文書にして添えた。

【神様がたった一度だけこの腕を動かして下さるとしたら 母の肩をたたかせてもらおう 風に揺れる  
ぺんぺん草の実を見ていたら そんな日が本当に来るような気がした】

最終的には9年続いた入院生活で、病室で寝泊まりしながら献身的に看護してくれた母。詩を書いたことはなかったが、口に出せない思いが言葉となった。展覧会は地元の新聞やテレビにも取り上げられ、大きな反響を呼ぶ。会場のノートには共感や励ましの声があふれ、星野さんにとっても喜びや希望となった。その後、花の詩画展は国内だけでなく、海外でも開かれた。

この頃、大きな変化が次々に起きた。まずはあごを動かすだけで操作できる電動車椅子が届いた。母や渡辺さんに車椅子を押しってもらう生活だったが、これからは自分で散歩や移動ができるように。富弘さんの生活が一変した。

もう1つが渡辺さんとの結婚。入院中に聖書と出会い、74年に病床でキリスト教の洗礼を受けた富弘さん。渡辺さんとともに聖書の言葉を心の支えにしていた。生活のメドもたった。「結婚しようか」。80年、富弘さんからプロポーズした。前橋キリスト教会で家族や友人に囲まれ、結婚式を挙げた。その時の2人の気持ちも詩に刻んだ。

【結婚ゆび輪はいらないういっただ 朝 顔を洗うとき私の顔をきずつけないように 体を持ち上げるとき私が痛くないように 結婚ゆび輪はいらないういっただ 今レースのカーテンをつきぬけてくる朝日の中で 私の許(もと)に来たあなたが洗面器から冷たい水をすくっている その十本の指先から金よりも銀よりも美しい雫(しずく)が落ちている】

療養を続ける富弘さんが絵を描くのは、主に群馬県桐生市の周囲を山々に囲まれた自宅。1日に描けるのは2時間ほどで、1枚の絵が完成するのに平均1~2週間、長いと20日ほどかかる。詩を書くときには、言葉が自然に出てくるのを待つ。「人によく思われたいと欲が出てしまうと、ダメですから。あいさつみたいに出てくる言葉がいい」

「我が身を切り刻んでも生きる力を富弘の中に送り込みたい」と語った母。2018年、97歳で永眠した。その母へのあふれる感謝の思いも、すべて花に託してきた。

【ほんとうのことなら 多くの言葉はいらないういっただ 野の草が風にゆれるように 小さなしぐさにも輝きがある】

というお話でした。



富弘さんの作品を展示した「富弘美術館」は群馬県みどり市にあります。私も十年くらい前に一度行かせてもらいました。

富弘さんの詩画集等は図書館にも沢山あります。ぜひ、多くの生徒の皆さんに読んで欲しいと思います。

詩画集『鈴の鳴る道』は、平成2年度~4年度まで、中学3年生の国語の教科書にも教材として掲載されました。私が担任をしていた時には、富弘さんのことや富弘さんが描いた詩画を題材に道徳の授業をしたり、学級通信に掲載したりして、子ども達と富弘さんのことや詩画に込められた思いを考え合いました。そのいくつかを紹介します。

〈3つの詩画をスライドで紹介〉

その星野富弘さんですが、今年の4月28日に、78歳でお亡くなりになりました。最後にその時の地方テレビ局のニュースで取り上げられた3分ほどの映像がありますので流します。



## 「共育ちを育む会」

6月3日、第二回参観日に共育ちを育む会（地区懇談会）が行われました。

5時間目に、「子どもとメディア信州」の野池言恵先生から、インターネットや SNS の利用の問題点、LINE等をめぐるトラブル、性被害防止について、さらに保護者としてどのようにスマホを管理するか、などについてお話を聞きました。その後、小学校ブロックに分かれ、保護者と地域の方、職員が車座になってスマホの持たせ方、情報（SNS）との向き合い方等について熱心に懇談をしていただきました。



大人が子どもに対してきちんと話をしなければならない、という話を聞いて、ハッとさせられました。中学にあがって、友達もスマホを持っているから、うちの子も欲しいといいます。でも、まだ持たせません。「自分の身体は自分でしか守れない」ということをしっかり受け止めたい。



SNS の知識は、子どもの方が進んでいる。単に「いけない」ではなく、親が知識を高めないといけないということを講演で学びました。

祖父が、「これからの時代の人間として必要」という考えから、買ってくれました。でも、中学生のうちは、親がスマホをしっかり見るということを決めています。自分のときの時代とはずいぶんちがうので、「こどもにとって面倒くさい親」になろうと思っています。

スマホを持たせた親としての責任がある。親として学ぶ必要がある。

野池先生のお話に合った「スマホ 18の約束」は、検索なさったでしょうか。まだご覧になっていない方、講演をお聞きになっていない方は、ぜひ検索をして、スマホの持たせ方や情報との向き合い方について確認をしていただきたいと思います。

## PTA 作業 ～ありがとうございました～

6月15日（土）、PTA 作業で土手の草刈りと教室のカーテン洗いを行っていただきました。

おかげさまで、きもちの良い環境で学ぶことができます。

ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。

